

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

文学部言語文化学科現代文芸論専修課程 3年

遠藤徹

2012年12月28日

・研究課題名

カレル・チャペックの文体変遷

・派遣先の基本情報

国：チェコ共和国

都市：プラハ

機関：カレル大学アルベルトフ学習センター

形態：個人派遣

期間：2012.11.4~12.20（総日数：47日）

・当初の計画

20世紀前半に活躍したカレル・チャペックは、ジャーナリストとして働く傍ら『R.U.R』『山椒魚戦争』といった戯曲、小説を執筆し、また童話、旅行記など多様な分野で作品を残した。彼の作品を多数翻訳している田才益夫氏によれば、チャペックの文体の変遷が、チェコにおける言文一致のきっかけになったという。

今回の派遣ではチャペックの作品を原文で読むための語学力の研鑽と、文学研究に必要な周辺知識を身につけることを目的とする。

・実際に達成された成果

カレル大学アルベルトフ学習センターにて6週間のチェコ語コースに参加した。授業は会話を中心としたチェコ語の運用能力向上に重きが置かれ、時期柄か参加者が少なかったため、少人数で密度の濃い演習を行うことができた。また、週に一度開講されるチェコの歴史、文学、映画についての講義を聴講した。特に文学の講義では、英語への通訳を通してではあるがチェコ人の研究者によるチェコ文学批評を聴くことができ、参考になった。

滞在した11,12月はクリスマスに向け街全体が盛り上がる時期であるとともに、ピロード革命記念日、初代チェコ共和国大統領ヴァーツラフ・ハヴェルの命日、聖ミクラーシュの日にもあたり、チェコ人にとって大切なイベントを体験することができた。

また、今回の派遣をきっかけに国内のチェコ文学研究者の方と交流をもつことができ、帰国後は一緒に勉強会に参加させていただいている。間接的ではあるが、これも今回の派遣で得られた大きな成果の一つである。

・今後の研究の展望

今回の派遣を通じある程度の語学力は身についたものの、チェコ語のテキストを原文で読み文体の変遷を研究できるレベルには到底達していない。今後は独学と勉強会を中心にチェコ語の読解力向上をはかりつつ、卒業論文執筆までできるだけ多くのチャペック作品を原文で読みたい。

チャペックに関しては数多くの先行研究が行われてきたため、幸いにも日本語で読める学術書も多い。卒業論文執筆にあたってはそれら先行研究を参照しつつ、原文と向き合うことになるだろう。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えて下さった次世代人文社会学育成プログラムの皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。